

を応用することによって、より複雑な同定や検索を可能にするものである。これらの技法の発達は従来あった分類学へのとりつき難さを軽減し、identification と taxonomy の分化をもたらすものであると信ずる。

電算機というと高次の数式を駆使する研究者の専用で、ふつうの分類学とは関係がうすい人と思う人が今なおあるようだが、文献検索はもちろんのこと、研究上のデータ処理、標本の管理運用などの面からみて、電算機利用に向いている領域は分類学は他分野より多いように思う。第一、電算機の基本的な機能は分類そのものであり、その操作も一度手ほどきを受ければ顕微鏡の扱いよりむずかしいとも思えない。分類学研究者が是非関心を持っていただきたいものである。(国立科学博物館植物研究部)

○熱帯アジアのカヤツリグサ科数種の学名変更(小山鐵夫) Tetsuo KOYAMA:
Nomenclatural remarks on some Cyperaceae from southeastern Asia

最近セイロン植物誌、タイ国植物誌その他にカヤツリグサ科植物の解説をしたが、その報文が出版されるのはかなり先になる。それらの報文の中で変更を提案した学名のうち、広くしばしば用いられるものを便宜上ここに発表する。変更の理由の詳細についてはいづれ本文を御覧下されば幸である。

***Pycereus flavidus* (Retzius) T. Koyama, comb. nova.**

Cyperus flavidus Retzius, Obs. Bot. 5: 13, Sept. 1788.

Cyperus globosus Allioni, Auctuar. Fl. Pedemont. 49, Jan.-Mar. 1789.

アゼガヤツリの学名が上ようになる。解剖学上の所見もあって、左右に扁平な果実を持つカワラスガナ属はカヤツリグサ属から区別して良いと思う。その際最も早い種小名は *flavidus* であるから上のような組合せが必要になる。原標本は以前コペンハーゲンで見てアゼガヤツリの穂の色の薄い個体である事を確かめている。

上に述べた理由で **タチガヤツリ** の学名はカワラスガナ属では次のようになる。インドのハッサン植物誌のカヤツリグサ科を書いているキュー植物園の Sheila S. Hooper 女史も私と同意見なので共同で組合せを作った。

***Pycereus diaphanus* (Schrader) Hooper & T. Koyama, comb. nova.**

Cyperus diaphanus Schrader ex Römer & Schultes, Syst. Veg. II. Mantissa 2: 477, 1824.

Cyperus latespicatus Böckeler in Flora 42: 441, 1859.

インドの半島部からセイロンにかけて褐色の表皮に包まれた球茎状の茎の基部を持つ *ニヌクグ* 属の小群がある。この中で次の一種は改組を要する。

***Mariscus Clarkei* (T. Cook) T. Koyama, comb. nova.**

Cyperus Clarkei T. Cook, Fl. Presid. Bombay 2: 873, 1908.

インドからマレーシア更にオーストラリアに広く分布する **カヤツリグサ** の一種

Cyperus hyalinus は学名が示すように膜質で脈のはっきりした穎を持ち、果実が左右に扁平で、小穂軸が基部で節するという特異な形質を持つ。この特長はヒメクグ属のそれであって、*C. hyalinus* は花序が散開して傘形となるほかヒメクグ属と撰ぶ所はない。特に葉の解剖所見はヒメクグ属のそれに完全に一致する。しかし花序が頭状であるか散開するかの違いはカヤツリグサ科では重要な特徴ではなく、現にヒメクグ属にも *Kyllinga transitoria* (Kükenthal, Pflanzenr. 4(20), 101 Heft: 574, 1936; sub *Cypero*) T. Koyama, comb. nova の如く、散梗を具えた種もあり、*Queenslandiella* 属は成立しない。従って本種をヒメクグ属に収める。よって、

***Kyllinga hyalina* (Vahl) T. Koyama, comb. nova.**

Cyperus hyalinus Vahl, Enum. Pl. 2: 329, 1806.

Mariscopsis hyalinus (Vahl) F. Ballard in Kew Bull. 32: 457, 1932.

Queenslandiella hyalina (Vahl) F. Ballard in Hook., Icon. Pl. 33: t. 3208, 1933. (ニューヨーク植物園及びニューヨーク市立大学)

○ 伊豆大島自生のビャクシン類 (常谷幸雄) Yukio JOTANI: The native junipers of Isl. Oshima, Prov. Izu

1887 年植物学雑誌 Vol. 1 に登載された、大久保三郎氏の「伊豆巡島記」によると、p. 98 に同年 4 月 18 日伊豆大島差木地村から野増村に至る間で、ハイネズを採集されたことが記されているが、1901 年松村任三博士はこれを *Juniperus taxifolia* Hook. et Arn. として同誌 Vol. 15, p. 138 に報じ、東京大学総合研究資料館植物部門にはその標本が現存し、標本台紙の名箋のすぐ上の部位に「殆ト葉ヲ失フ 16/viii/1900」と記されているが、現在学名の *taxifolia* と書かれた部分が線をひいて消されている。

1912 年小泉源一博士は、同誌 Vol. 26 に「伊豆大島植物地理略」を登載し、(乙)植物目録中 p. (214) にビャクシン *Juniperus chinensis* L. とハヒビャクシン *J. chinensis* var. *procumbens* Endl. を記録され、同部門に小泉博士が同年 3 月 18 日伊豆大島で採集された各 1 枚の標本が残されており、一つは *Juniperus chinensis* L. ビャクシン、一つは *Juniperus chinensis* var. *procumbens* Endl. ハヒビャクシン、ソナレと記された名箋が貼ってあるが、これら 2 枚の標本は後の研究者により、名の一部が消されたり加筆されたりしており、前者は *chinensis* L. ビャクシンの部分が線をひいて消され、かわりに *conferta* Parl. と記入せられ、また名箋のすぐ上の部位に *Juniperus taxifolia* Hooker et Arnold シマムロ (T. Nakai) と記され、それが線をひいて消されている。後者は *chinensis* L. が線をひいて消され、かわりに *conferta* Parlat. var. と記入され、ビャクシンに線をひいて消してネズと記入され、ソナレに線をひいて消してあるが、名箋のすぐ上の部位に *J. conferta* var. ト考フ (H. T.) (Wilson 氏=依レバ大島=ハそなれナシ) と記され、また *J. conferta* var. の下に